

学年代表世話役が参加

第7回同窓会総会開催



活発な議論が交わされた総会

同窓会会報

第7号

平成18年3月1日

発行

鹿児島大学教育学部
同窓会

〒890-0065
鹿児島市郡元1-20-6
電話099-285-7711

平成十七年度第七回同窓会役員総会が昨年八月二十八日、教育学部会議室で開かれた。今回は、新しく学年代表世話役、学部教官新理事も加わり、かねてにない多くの参加者があった。

開会に当たり松元兼俊会長が、平成十年一月の同窓会発足のいきさつをはじめ、本年度から組織の改善に努めたことを述べ、「わが学部の同窓会

は財源は乏しいが、知的財産はどこにも劣りません」と挨拶した。続いて現中山右尚学部長、前坂尾隆学部長、元島田俊秀学部長の挨拶があった。

会議は大馬場茂理事の進行で進められ、会務報告の後、石神正明理事を議長に六つの議事を協議してすべて議決した。平成十六年度の決算については、平岡順義監事、川内輝

監事の監査報告を受け、平成十七年度の事業計画案と予算案を審議して議決承認された。規約改正では「役員」第六条に「学年代表世話役 若干名」を挿入、第七条の「役員は会員の中から選出する」一項に「学年代表世話役」を付け加えた。また、新しく理事として、学部職員の中のもの

が承認された。

同窓会役員

顧問	島田俊秀
〃	坂尾隆
〃	中山右尚
会長	松元兼俊
副会長	池之迫静男
〃	松永郁男
理事	有馬暢洋
〃	石神正明
〃	犬馬場茂
〃	榎添利光
〃	上村睦郎
〃	佐藤敦子
〃	橋野奈々代
〃	福島嘉久
〃	松元桂子
〃	今林俊一
〃	新名主健一
〃	南孝一
〃	假屋園昭彦
監事	平岡順義
〃	川内輝
幹事	佐賀義彦
〃	中原賢二
支部世話役	川崎芳夫
〃	木佐貴照
〃	辰野吉郎
〃	松山司郎
〃	向原翼
〃	宮田牀志
〃	松崎弘一
〃	海江田幸雄
〃	笛田茂
〃	川井田稔
〃	羽生昌弘
〃	竹下徹
事務	野間ひろみ

新役員

役職	氏名
副会長	松永郁男
理事	佐藤敦子
監事	平岡順義
幹事	佐賀義彦
〃	中原賢二
支部世話役	向原翼
〃	竹下徹

新理事

国語	教授	松清秀一	技術	講師	寺床勝也
数学	教授	植村哲郎	家政	教授	生野桂子
保健体育	教授	藤島仁兵	心理	助教授	川畑秀明
健康教育	教授	南貞己			
〃	教授	西種子田弘芳			
〃	助教授	末吉靖宏			
〃	助教授	福満博隆			
美術	助教授	下原美保			

学年代表世話役 (数字は卒業年次)

26年	田口幸治	36年	文城テツ子	50年	井上浩一	04年	小久保博幸
27年	山下一男	37年	大迫征人	51年	水之浦修	〃	内野公貴
〃	富田次男	〃	柳山重遠	〃	田之上齊	05年	中村弘
28年	加籠六溢朗	38年	田中純也	52年	寺師千歳	〃	渡辺直哉
〃	加藤吉行	〃	松山輝久	〃	真邊省至	06年	近藤陽介
29年	海老原一男	〃	立山龍男	53年	東園和臣	〃	大脇茂久
30年	大塚義雄	39年	横峯正之	〃	天野芳子	07年	山之内太一
〃	兼広晨史	〃	中野翠	〃	大野清昭	08年	森安弘
〃	大塚俊郎	〃	林賢一郎	54年	脇黒丸悟	〃	上村修
〃	町田洋一	40年	吉峰明子	〃	勝目吉昭	09年	藤島伸一郎
31年	早水秀久	〃	西望	55年	古賀政文	〃	大園紀香
〃	鬼丸正子	〃	馬場大三郎	56年	坂元裕人	10年	中村麻子
〃	永田信道	41年	福田賢治	57年	下向輝光	〃	税所賢太郎
32年	新堂忠和	〃	川内野一弥	58年	駒走正二	11年	馬越博之
〃	山下穂九郎	42年	早川良行	〃	有馬純一	〃	遠矢博貴
33年	内木場三佳	43年	出口定昭	59年	川原浩亀	13年	新名主幸二
〃	東野利喜男	44年	西崎大策	〃	岩元幸成	14年	渡辺貴文
34年	有馬俊次	〃	地頭方ミヨ子	60年	大平公明	15年	松下賢司
〃	本野一郎	45年	平澤光徳	61年	日置誠	〃	小牟禮雄一
〃	田畑喜久男	〃	上林房時光	〃	前田伸行	16年	矢野美由紀
35年	元山昌子	46年	中園政彦	62年	長元武彦	〃	黒岩真紀子
〃	江口英雄	47年	吉留孝信	63年	下原美保	17年	小原一慶
〃	吉盛国治	48年	永田憲太郎	01年	前田博王	〃	喜世川匡
〃	竹井勝志	〃	有村孝	02年	山田吉夫		
36年	鮫島寛行	49年	上林房一正	〃	福島三鈴		
〃	福山孝一	50年	藤田教夫	03年	西淳一		



学校退職後、加治屋町にある「維新ふるさと館」で郷土史とかかわり毎日を過ごしている。観光客の鹿児島に対する関心もきわめて高い。

確かに、鹿児島ほど自然に恵まれ、史跡など文化遺産の豊富なところはない。薩摩といえど質実剛健、意気盛んな侍精神「武の国薩摩」を思い浮かべる人が多いが、文化面でも日本の先端を走ってきた地である。

「日の丸」や「君が代」の発祥も鹿児島である。「日の丸」が藩主島津斉彬の建言によって日本の総船の船印となり、その後明治三年の太政官布告によって「郵船商船規則」に日の丸の規格規定がなされ、以後国旗としての機能を果たしてきたことは今では広く知られている。

しかし、「君が代」の発祥が鹿児島であることはあまり知られていない。もちろん現在の「君が代」ではない。薩摩は、明治二年軍楽隊を組織し、三十名の研修生を横浜に派遣、イギリス領事館の軍楽隊長フェントンに吹奏楽を習った。これは日本人が西洋音楽を手

がけた始まりであり、最初の吹奏楽団であった。このときフェントンが「日本には国歌がないので歌詞があればつくってやる」と言ったことから、大山巖など鹿児島出身者が薩摩琵琶の「蓬莱山」の一節から「君が代」の歌詞の部分に抜粋しフェントンに渡した。そのフェントンが作曲した「君が代」の曲を明治天皇の前で演奏したのが薩

寄稿

「郷土を知り、語れる子供」を育てたい

維新ふるさと館指導員

福田賢治(昭和41年卒)

字で書いている。これなど薩摩の伝統文化の深さを物語るいい例である。明治維新という日本の近代国家建設に中心的役割を果たした鹿児島の歴史は、全国どこの人と話しても共通の話題となる。日本の歴史を塗り替えた鹿児島に対する県外からの関心は今も非常に高く、鹿児島の歴史に詳しい人も多い。

地元鹿児島に住む人々はどうであろうか。いかに鹿児島のことを知り、語れるであろうか。国際性の重要な要素の一つが異文化理解であるとするならば、郷土の文化や歴史を語り尊重する子供の育成は、今以上に重要視されねばならない。郷土愛や愛国心などという言葉で言ってみても身につくものではない。

先人の偉業や遺跡など本物に触れ、具体的な事例を通して本人が自得、感得した中から自然に子供の心に湧き出してくるものでなければ定着しないのである。子どもたちがふるさとを語り、愛し、そして、そこに育ったという誇りと自信を抱いて生きていくように、そんな思いを胸にささやかなりとも日々努めていきたいと願っている。

「君が代」の歌詞はもと「古今和歌集」や「和漢朗詠集」にある。薩摩では、古くからこうした和歌を謡曲、箏曲、侍踊り、薩摩琵琶などに取り込んできた。二十五代島津重豪は、すでに「君が代」をローマ



「教室に入れられない」「友達から嫌みを言われた」「仲良しの子に挨拶したのに無視された」など、教育相談をしている私にいろいろ訴えがなされます。不登校、保健室登校など、その状態は様々です。また、訴えることのできる生徒がいる一方で、相談することを知り、我慢していたり、訴えを躊躇している様子の生徒もいます。そして通常、生徒の訴えに対しては、当人を中心にして、必要に応じて担任の先生や保護者も交え、その理解と対応を考えることになりす。

生徒の訴えを理解しようとするとき、私はしばしば、その生徒のその時々の中で考えていることをつきとめて、それを説明しようとしています。A君が〇〇するのは、〇〇したいからだ。B君が〇〇しないのは、〇〇したくないからだ。C君が〇〇するのは、〇〇が△△だと思っっているからだろう。

このような説明の仕方をしていくと、生徒の考えや行動を変えさせるには、生徒の心の中を変えさせるさせるしかないと思っまいます。また、生徒の行動を変えるには、生徒の心の中を変えなければならぬ。A君に〇〇をさせるには、〇〇をしたくなるようにしてあげるのがいい。B君に〇〇をさせないためには、〇〇をしたくないようにさせればいい。C君に〇〇をさせるには、〇〇が△△だと教えてあげればいい。

教育相談の向こうに見えるもの

鹿児島大学教育学部教授

今林俊一(昭和54年卒)

ことになりす。また、生徒の行動を変えるには、生徒の心の中を変えなければならぬ。A君に〇〇をさせるには、〇〇をしたくなるようにしてあげるのがいい。B君に〇〇をさせないためには、〇〇をしたくないようにさせればいい。C君に〇〇をさせるには、〇〇が△△だと教えてあげればいい。このような、生徒の心の中を理解しても、実際は生徒は全く別のことを考えて行動することが多いものです。「生徒がこういうつもりでやっているのだ」と思っていたら、全然違っていた」といった状況です。

つまり、実際の生徒の考えや行動の意味は、私の解釈(理解)や予測とズレてしまっている。しかしながら、生徒の心の中に焦点をあてているときは、そのようなズレは、やがて私の心の中に跳ね返ってきます。「もっと、ちゃんと生徒の気持ちを理解しなくちゃいけない」と。このような絶えざる反省は、ますますエスカレートし、ますます生徒の心の中を理解しようと思っこれ考えが深まると、ますます現実の生徒からズレてしまします。そのたびに、ますます私は、反省を深めてしま

の心の中を見ようとするのでなく、その生徒の立場に立つて、生徒の周りを見ることです。

教育相談の向こうに見えるものは、あれやこれやの特定の原因ではありません。良かれと願う人による、多くの行き違いやしがらみの中で、変えようにも変えられないことに直面し、葛藤しながら、わずかなきつかけの積み重ねを大切にしていることとする取り組みです。特定の原因が明確になされない中、関係の網目が少しずつ変容すること、結果的に望ましい生徒理解や対応が実現できるのではないのでしょうか。そして、生徒ひとりひとりの発達もそのような関係の網目の中で構成されるものでありうといえるでしょう。

生徒の身長や体重が平均値で表されるように、標準的(一般的・常識的)な解釈というものも想定することはできません。しかし、ひとりひとり違う生徒にとって生き方や幸福・願いなどに一定の形があるはずもありません。ある生徒にとつての幸福は別の生徒にとつての不幸であるかもしれない。

教育相談の中で、「〇〇とも言える」というような、あらゆる可能性を瞬時に判断するユーモアの感覚の育む自在な価値観を私は磨いていきたい。

私の提言

～子どもたちの指導に潤いを～

いつの時代も、子どもたちをどのように育てるかが問われる。今日は少子化の時代、子どもたちの人数と同時に心の質を問わなければならないと思われる。同時に、子どもたちにとっては受難の時の感がする。子どもたちを親から預かって、直接子どもたちの教育にたずさわる学校の先生方のご苦労は理解できるが、今また問われているのは真摯な教師像である。親や社会の要請に的確に対応できる学校現場の先生方であってほしいものである。

かつて学校現場で活躍された先輩の同窓生6名の先生方に貴重なご提言をお願いした。

栽培のこころ

川崎 芳夫 (昭和31年卒) 退職校長 副会長



社会全体がひずみを起こしているような状況の中で、児童生徒の教育に真剣に立ち向かっている現場の方々に、声援を送ります。

退職後十余年、今思うことは、植物の栽培にもう少し理解と経験を持つべきだったという事です。

植物は語りません。条件次第でよく育ちもし、場合によっては枯死することさえあります。生育上の問題を発見するには、まず状況をじっくり観察するしかありません。観察によってトラブルの原因と、改善に必要な手だてがわかってきます。手だては即刻必要な場合もあれば、じつと待つ時間が必要な場合もあり

大人の「生きる知恵」を子どもに

川内野 一彌 (昭和41年卒) 吉野公民館長



昨年、鹿児島市内の中学生4人が防空壕らしき洞窟内で焚き火をし、一酸化炭素で中毒死するという痛ましい事故が起きた。

昔はどこも大家族で、父母や祖父母から日常生活の中で「生きる知恵」を学ぶことができた。「洞穴で火を焚くと危ないぞ」とガキ大将は、酸欠で死ぬことを遊びの中で教えてくれた。また、「あの川は河童がいるよ。一人で泳ぎに行くな」とよく祖父は言った。深みで溺死するのを恐れ、経験を通した大人の「生きる知恵」として危険回避能力や危険予知能力をこのような方法で教えたのだろうと思う。昔は家庭生活の中や遊びを通してこのような能力を身につけることができた。

今は、核家族が多く、自然体験や社会体験も少なく、容易に祖父母などから「生きる知恵」を学ぶ機会が少ない。夏休み等は、集団宿泊学習やキャンプをしたり、祖父母を訪問したりする等、大人の「生きる知恵」を学

ぶ絶好の機会である。意図的に危険回避能力や予知能力が身につく活動を企画し、子どもたちにいるいろいろな体験を通して「生きる知恵」を身につけさせたいものである。

子供たちに読書の喜びを

羽生 昌弘 (昭和32年卒) 中種子町教育長



題として取り組んでいます。子供たちが読書に親しみ、喜びを持たせるためには、まず、教師や保護者が、自ら読書好きになることが必要であると思えます。

本町では、校長・教頭・自主的研究グループの先生方が、読書会を開き、討論したりして読書に関する理解を深め、各学校の朝の読書等での読み聞かせに生かしたりしています。

保護者も、学校の親子読書会で読み聞かせをしたり、読書週間には、保護者が、各学級で読み聞かせをしたりしている学校もあります。家庭での読み聞かせも進めています。

このようにして、子供たちの読書への喜びも増しつつありますが、今後とも、学校・家庭・地域が協力して、子供たちを読書に親しませたいと思っています。

三つの共通価値観

中野 翠 (昭和39年卒) 鹿児島高等予備校 非常勤講師



二〇〇五年はついに日本の総人口が減少に転じた。日本文化は制度・組織や文物など

による表層文化と、自然神・祖先神や儒教・仏教などによる精神文化の基層(深層)文化で構成されると考えている。

表層文化は各時代に変容する「流行」部分であり、基層文化はどの時代にも「不易」部分として普遍性を持ち続けた。しか

「迎えに行っても学校に来ない子、何度注意しても授業中に教室から出ていく子、学習に興味を示さず用具も忘れ学習しようとしないう子などがクラスに四～五人もいます。厳しく指導もしてはいますが、親にも相談するのですが、成果が上がっていません。これは最近の教育研究会で出された学校の実態であり、教師の心情の吐露でしょう。

これに対して、「朝一緒に登校しよう」と声をかけ始めて半年です。まだ首を振るばかりです。

職場で切磋琢磨を

隈元 俊弘 (昭和36卒)



りですが、毎日迎えに行きます。無理な時は携帯で連絡をとります。親の仕事の都合で夜の家庭訪問です。親の生きてきた道を子どもと聞きま

す。親の願いも。教師自身のこととも語ります。こうしたことを積み重ね、子どもの内奥に生ずる変化を捉えながら向かい合っていきます。学校の仲間と議論しながらです。わずかな兆しでもうれしいです。希望が膨らみます」と語る若い教師の顔が輝いています。

子どもの心に寄り添い自立を支援する教師の成長は、教師間の切磋琢磨で育まれてきたと体験からも確信しています。先生方のご健闘を祈ります。

へき地教育への思い

田中 純也 (昭和38年卒) 南大隅町 教育長



定年退職後、これまで体験することのなかった複式教育に関わるようになって、考えさせられることがいっぱいある。それは複式教育のかかえる諸問題である。複式学級によさはいつ

いあるとはいえないものの、単式に比べると比較にならない。先生に教わり、一緒に考え、助言してもらえ直接の時間は単式の二分の一に限られている。また、間接指導では、何をしようか分からないまま時間を過ごす子どももいる。子ども同士で考えを高め合っていくこともそんなに期待できない。

このような複式教育での間接指導の時間の子どもをつまづきを少しでも解消しようと、今年度は町として複式学級指導補助員を配置し、間接助けしようとする取り組みを始めたところである。

県では、平成十七年度から三十人学級が取り入れられた

が、単式学級以上に、私は複式学級に手を差し伸べてもらいたいと考えている一人である。また一方では、へき地教育に情熱を傾け、教育愛に溢れた若手教師が一人でも多く出てくることを願うのである。

が次の三点を共通価値観として、子供たちに身につけさせることが責務であると考える。

①自分は周りの人々の支えや他の生き物の命をいいたいで生きているという感謝の気持ちを持つこと(いたたきます心の心) ②自然や祖先への畏敬の念を持つこと(天に恥じない心→自らブレーキを) ③郷土の歴史や自然に対する愛郷心を持つこと(郷土に癒される心→勇気)。子供たちの意欲喚起と脳力活性化に知恵を絞りたい。

平成16年度決算書

1. 収入の部

(単位:円)

事項(区分)	予算額	決算額	増減額	備考
前年繰越	11,079,550	11,079,550	0	
会費	4,570,000	2,950,000	△1,620,000	新入生 2,380,000 卒業生 0 既卒者 570,000 計 2,950,000
預金利息		876	876	
計	15,649,550	14,030,426	△1,619,124	

2. 支出の部

(単位:円)

事項(区分)	予算額	決算額	増減額	備考
事務経費	350,000	308,125	41,875	賃金、通信、文具、郵送料他
会議費	150,000	234,000	△84,000	代表者会議、役員会、総会、臨時役員総会等
事業費	400,000	655,005	△255,005	会報作成費、発送費、鹿児島県の教育を語る会、大学祭等プロジェクト経費
総会準備基金	2,000,000	0	2,000,000	総会開催準備積金
後援会出資金返還	500,000	500,000	0	同窓会設立時の教育学部後援会からの出資金の返還(15、16年度の16年度分)
会費返却	0	10,500	△10,500	二重払込者への会費返却
計	3,400,000	1,707,630	1,692,370	
予備費	12,249,550	0	12,249,550	
次年度繰越		12,322,796		会費積立金(記念事業のため)

事業計画

事業の概要

鹿児島大学教育学部同窓会会則第2条に定める目的を達成するため、第5条による事業を次のとおり計画した。

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 平成17年4月7日 鹿児島大学同窓会連合会設立総会への参画 | 8. 平成17年11月 大学祭の学部企画事業への共催 |
| 2. 平成17年4月8日 新入生学部企画オリエンテーションへの参画 | 9. 平成17年11月 同窓会主催「鹿児島県の教育を語る会」事業を実施 |
| 3. 平成17年7月1日 同窓会代表役員会を開催 | 10. 平成17年11月 「鹿児島県の教育を語る会」会誌の発行 |
| 4. 平成17年8月2日 同窓会代表役員会を開催 | 11. 平成17年12月 同窓会会報第7号の発送 |
| 5. 平成17年8月28日 同窓会役員理事会を開催 | 12. 平成18年2月 昭和34年、43年卒業生への案内 |
| 6. 平成17年8月28日 同窓会役員総会を開催 | 13. 平成18年2月 平成18年度新入生への案内 |
| 7. 平成17年11月 同窓会会報第7号の発行 | |

平成17年度予算

1. 収入の部

(単位:円)

事項(区分)	予算額	備考
前年繰越	12,322,796	会費内訳
会費	4,570,000	17年度新入生 294名 457×10,000=4,570,000円 16年度卒業生 63名
計	16,892,796	既卒者100名(見込み) 計457名

2. 支出の部

(単位:円)

事項(区分)	予算額	備考
事務経費	350,000	賃金200千円、印刷費、通信費、消耗品費、備品費等150千円
会議費	240,000	役員代表者会、役員総会経費
事業費	1,200,000	会報作成170千円、発送費140千円、同窓会連合会設立加入100千円、後継者育成事業170千円、「鹿児島県の教育を語る」会誌発行400千円、大学祭における共催企画190千円、新入生学部企画オリエンテーション30千円
総会準備基金	2,500,000	総会開催準備積金(平成13、14、15、16、17年度分)
予備費	1,000,000	
計	5,290,000	
次年度繰越	11,602,796	会費積立金(記念事業のため)

鹿児島大学同窓会連合会発足

鹿児島大学が国立大学法人鹿児島大学へと移行する直前の平成16年1月16日に、永田行博本学学長の呼びかけで、各学部同窓会の代表者が出席して「鹿児島大学同窓会組織に係る懇談会」が開催されました。そこで同窓会連合会の設立について賛同が得られ、設立準備委員会において約1年間準備が進められました。

平成17年4月7日、鹿児島市内のホテルにおいて鹿児島大学同窓会連合会の設立総会が開催され、鹿児島大学の8学部の同窓会（法文学部同窓会、教育学部同窓会、理学部同窓会、医学部同窓会鶴陵会、歯学部同窓会、工学部同窓会、農学部あらた同窓会、水産学部同窓会魚水会）を会員とする「鹿児島大学同窓会連合会」が設立されました。

本学同窓会連合会は、各学部の垣根を越えた横断的かつ有機的な同窓生相互の交流と親睦を深めるとともに、国立大学法人鹿児島大学が社会との連携を図っていくうえで中核的な役割を果たし、さらに、鹿児島大学と同窓生との情報交換や連携協力を緊密にし、もって、鹿児島大学の発展と学術の振興に貢献することを目的とする組織であります。

会 則

第1章 総則

(名称)

第1条 本会は、鹿児島大学同窓会連合会と称する。

(目的)

第2条 本会は、鹿児島大学の学部別同窓会（以下「学部別同窓会」という。）の連合組織として、鹿児島大学の基本理念の達成に協力し、その発展に寄与するとともに、会員相互の交流及び親睦を行うことを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するために、次に掲げる事業を行う。

- (1) 鹿児島大学との連携及び協力
- (2) 学部別同窓会間の交流及び連携の推進
- (3) その他本会の目的に沿った事業活動

(支部)

第4条 本会に支部を置くことができる。

第2章 会員

(会員)

第5条 本会は、次に掲げる学部別同窓会をもって組織する。

鹿児島大学法文学部同窓会
 鹿児島大学教育学部同窓会
 鹿児島大学理学部同窓会
 鹿児島大学医学部同窓会鶴陵会
 鹿児島大学歯学部同窓会
 鹿児島大学工学部同窓会
 鹿児島大学農学部あらた同窓会
 鹿児島大学水産学部同窓会魚水会

第3章 役員等

(役員)

第6条 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長 1人
- (2) 副会長 若干人
- (3) 代表幹事 1人
- (4) 幹事 学部別同窓会及び鹿児島大学からそれぞれ若干人
- (5) 評議員 学部別同窓会から各4人
- (6) 監事 若干人
- (7) その他会長が認めた者

(役員を選任)

第7条 会長、副会長、代表幹事及び監事は、総会において選任する。

(役員の仕事)

第8条 会長は本会を代表して会務を総理する。

- 2 副会長は会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代行する。
- 3 代表幹事は会務の執行を総括し、事務局を統括する。
- 4 幹事は本会と学部別同窓会との連絡調整を図るとともに、幹事会の構成員として、会務の執行上重要な事項を審議する。
- 5 評議員は総会の構成員として、重要事項を審議する。
- 6 監事は会計の執行状況の監査を行う。

(役員任期)

第9条 役員任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、役員に欠員が生じた場合の補欠の役員任期は、前任者の残任期間とする。

(名誉会長及び顧問)

第10条 本会に、名誉会長及び顧問を置くことができる。

- 2 名誉会長及び顧問は、会長が委嘱する。
- 3 名誉会長及び顧問は、総会に出席し、意見を述べることができる。

第4章 会議

(会議)

第11条 本会の会議は、幹事会及び総会とする。

(幹事会)

第12条 幹事会は、会長、副会長、代表幹事及び幹事をもって組織する。

2 幹事会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 総会に付議すべき事項
- (2) 総会の審議を要しない業務の執行に関する事項

(総会)

第13条 総会は、第6条各号に掲げる役員をもって組織する。

2 総会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 役員を選任に関する事項
- (2) 事業計画及び事業報告に関する事項
- (3) 予算及び決算に関する事項
- (4) 会則の改廃に関する事項
- (5) その他会長が必要と認めた事項

3 総会は、毎年度1回、会長が招集し、その議長となる。

4 総会は、第1項に規定する役員過半数の出席により成立し、議事は、出席者の過半数をもって決する。ただし、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第5章 会計

(経費)

第14条 本会の経費は、学部別同窓会の分担金、寄附金をもって充てる。

(会計年度)

第15条 本会の会計年度は、4月1日から翌年の3月31日までとする。

(監査)

第16条 会長は、会計年度ごとに決算書を作成し、監事の監査を受けなければならない。

第6章 事務局等

第17条 本会に、その事務を処理するため、事務局を置く。

2 事務局は、当分の間、鹿児島大学内に置く。

(雑則)

第18条 この会則に定めるもののほか、本会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附則

この会則は、平成17年4月7日から施行する。

同窓会連合会の役員名は6面に掲載

理想の教師像を模索

第4回「鹿児島の教育を語る会」開催



第四回「鹿児島の教育を語る会」は昨年暮れの十二月六日、教育学部一〇三号教室に八十人の学生、卒業生、教官ならびに、当日、同学部で行われていた平成十七年度国際大学交流セミナーに参加している中国南京工業大学の教員と学生(日本語科)十一人も出席して開かれた。

開会にあたって松元兼俊同窓会長が「今日は、こうして『鹿児島の教育を語る会』を催したところ、師走の繁忙にもかかわらず、多数の方々のご来席をいただきましたことを深くお礼申し上げます。特に、教育学部ご当局の絶大なご協力に感謝申し上げます。また、今日は、国際交流セミナー『日本国際理解教育現状と未来・日中言語教育の体験的比較を通して』として南京工業大学の皆さんが同席していただいております。日中友好の相互理解を深めるためにも、意味深いものだと歓迎いたしております。私も何年か前、中国に行ったことがありましたが、そこにはロン

ドンやパリにはない何か故郷にも似た温もりがあったように記憶しています。私たちの心の中に『ふるさと』があります。そこには、いつでも帰って座れる場所があります。人によっては『故郷は帰るまじきところ』という人が、それでも速くありて想い、涙し

て止まないところが『ふるさと』であります。鹿児島大学教育学部は私にとって第二の故郷であります。齢をとってまいりますと減るものばかりで、増えるものは血糖値、コレステロール、血圧ぐらいのものであります。今宵は、若い大学生の皆様とこうして年に一度お会いし、『鹿児島の教育』について意見交換ができますことは、誠に楽しいことであります」と挨拶した。

つづいて、中山右尚教育学部長は「ただいま、松元会長からお話がありました。毎年同窓会主催の『鹿児島の教育を語る会』が、この十一月か十二月に行われて、もう四回になります。季節の催し物のようになっています。同窓会からのご援助もあっております。会長はじめ先輩方のお考えは、同窓会といえどホテルなどで酒食を主とする集いというのが普通で

ありますが、われわれの同窓会は学生諸君と語ったり、本校の諸活動を支援するなど、母校と一体となって活動しようというものであり、大変ありがたいことだと感謝しております。大学祭にいたしましても、『プロジェクトX』という名で、同窓会と共催というものをさせていただきました。それが終わりますと、こうして『語る会』、さらに食事を交えて懇親会と心豊かな取り組みをしていただいております。大変ありがたいことと感謝しております。今日もたくさんの方々の参加をありがとうございます。先陣の方のお話もありがとうございます。今日は偶然にも南京工業大学で日本語や英語を学ぶ三年生、四年生が『国際大学交流セミナー』でみえ、こうして一緒に参加し、日本の学生がどのようなことを話されるか、日本語の達人の方々ですから、よく理解され、聞いて

「語る会」は、今林俊一教授の司会・進行で、学生の発表は、持ち時間各五分間で十六人の学生と二人の卒業生で行われ、学生生活のあらゆる体験をもとに、教師としての心構えや教育に対して学生らしく新鮮な発表をした。

おわりに、池之迫静男副会長が、学生と卒業生の貴重な発表にお礼の言葉を述べ、「私が十七、八歳のころ、師範学校予科の学生のとき、声高らかに歌った校歌の『教えの庭

発表者一覧

○各専修学生代表

- 国語 3年 内村 興正 「理想の教師」
- 社会 3年 甲斐 学 「私が子どもたちに教えたこと」
- 数学 3年 深堀幸太郎 「充実した四年間」
- 理科 3年 大窪 真吾 「ふりかえってみて気付くこと」
- 音楽 4年 村岡 美香 「大学生活で感じたこと」
- 美術 4年 榎下町さやか 「大学生活を振り返って」
- 保健体育大学院1年 田島 大志 「私の教師像と夢」
- 技術 3年 麓 光樹 「私の目指す指導者」
- 家政 4年 広津 亜弓 「教師を目指すものとして」
- 英語 3年 塩田 尚卓 「鹿児島の教育」
- 教育学 3年 下園 博志 「学生における大学祭の役割について」
- 心理学 4年 柿川 一行 「鹿児島の教育について考える」
- 障害児教育 4年 高木 千穂 「大学四年間で学んだこと」
- 地域社会教育 4年 中島 涼子 「大学四年間で学んだこと」
- 国際理解教育 4年 金政 美静 「教育実習を通して考えた鹿児島の教育について」
- 健康教育 4年 松木 由佳 「育てるといふこと」

○教育学部OB代表

- 昭和32年卒業 櫻添 利光 「教育相談で何を語るか」
- 昭和39年卒業 中野 翠 「創造力の蓄積による自己表現の育成」

鹿児島大学同窓会連合会役員

名誉会長	永田 行博 (鹿児島大学長)	山田 誠 (法文学部長)
顧問	東 四郎 (名誉教授)	石田 尚治 (理学部長)
	中山 右尚 (教育学部長)	西川 殷維 (歯学部長)
	小田 紘 (医学部長)	下川 悦郎 (農学部長)
	皆川 洋一 (工学部長)	
	松岡 達郎 (水産学部長)	
会長	江口 正純 (法文学部同窓会会長)	川 如 隆 (理学部同窓会会長)
副会長	松元 兼俊 (教育学部同窓会会長)	松下 哲郎 (歯学部同窓会会長)
	尾辻 義人 (医学部同窓会鶴陵会会長)	赤崎 義則 (農学部あらた同窓会会長)
	永田 実秋 (工学部同窓会会長)	
	伊牟田 茂夫 (水産部同窓会魚水会会長)	
監事	橋本 幸雄 (法文学部同窓会監事)	川内 輝 (教育学部同窓会監事)
代表幹事	林 満 (農学部あらた同窓会常任副会長)	
幹事	皆村 武一 (法文学部同窓会常任理事)	池之迫 静男 (教育学部同窓会副会長)
	大木 公彦 (理学部同窓会副会長)	高松 英夫 (医学部同窓会鶴陵会幹事)
	是枝 美行 (歯学部同窓会副会長)	末吉 秀一 (工学部同窓会庶務幹事)
	岩元 善巳 (水産部同窓会魚水会理事)	竹田 靖史 (鹿児島大学理事)
評議員	脇田 稔 (法文学部同窓会副会長)	石 踊 政昭 (法文学部同窓会副会長)
	川井田 健一 (法文学部同窓会副会長)	本田 道輝 (法文学部同窓会常任理事)
	石神 正明 (教育学部同窓会理事)	福島 嘉久 (教育学部同窓会理事)
	南 孝一 (教育学部同窓会理事)	松永 郁男 (教育学部同窓会理事)
	愛甲 正 (理学部同窓会幹事)	阿部 美紀子 (理学部同窓会幹事)
	坂元 雄 (理学部同窓会幹事)	古川 一男 (理学部同窓会幹事)
	米盛 學 (医学部同窓会鶴陵会副会長)	黒木 克郎 (医学部同窓会鶴陵会副会長)
	瀬戸山 史郎 (医学部同窓会鶴陵会副会長)	山形 圭一郎 (歯学部同窓会広報理事)
	濱崎 徹 (歯学部同窓会厚生理事)	登 正太郎 (歯学部同窓会会計理事)
	瀬戸口 尚志 (歯学部同窓会鹿大支部長)	高崎 征忠 (工学部同窓会機友会会長)
	萩原 健 (工学部同窓会錦水会会長)	鎌田 隆男 (工学部同窓会南窓会密会会長)
	古川 良英 (農学部あらた同窓会副会長)	堀切 俊幸 (農学部あらた同窓会副会長)
	榎下町 鉦敏 (農学部あらた同窓会常任幹事)	富永 茂人 (農学部あらた同窓会常任幹事)
	前田 一巳 (水産部同窓会魚水会副会長)	四宮 明彦 (水産部同窓会魚水会専務理事)
	藤 枝 繁 (水産部同窓会魚水会専務理事)	門 秀 策 (水産部同窓会魚水会理事)

にわれ立たん」の一節が思い出される。今まさに、学生の皆さんが真摯な態度で教育という仕事に向き合い、『教えの庭に立つ』心構えができていくことに感動しました。今日、日本人の道義が地に落ちていると思われま。これは教育の力にしか頼れないと思えます」と講評をした。

この後、午後六時二十分頃から、大学構内の食堂「エデュカ」でアルコール抜きの懇談会が開かれ、学生と大学側、卒業生が親しく語り合い、『語る会』のすべてが終わった。

※「鹿児島の教育を語る会」は、第一回から第四回を小冊子にまとめて三月発行する。

梅香かおり春近し。会報第七号発行▼本号もまた本部の無理な原稿依頼を、快くお引き受け下さった同窓生の皆様に感謝いたします▼平成十七年四月に設立された鹿児島大学同窓会連合会会則と役員名を記載したので六ページ組みになりました▼会則改定で一人の学生代表世話役が決まりました▼組織拡充が進むので、組織拡充が進展することでしょう▼これまで同窓会のため献身的にご支援下さいました中山右尚教育学部長が退任されます。ありがとうございます。次期学部長は河原尚武教授(教育方法学)が選任されています。(池)

編集後記